



木曾呂の富士塚

貴重な信仰遺産である富士塚の保存管理の調査に文化庁が重い腰を上げたのは、昭和五十三年のことでした。その翌年、台東区下谷小野照崎神社境内富士塚、豊島区高松町長崎富士塚、練馬区江古田神社境内富士塚の三基が、五十五年には、埼玉県川口市木曾呂の富士塚が、国有形民俗文化財の指定を受けることができました。

しかし、その後の保存管理は十分とはいえず、現在までに都道府県レベルでの文化財に指定された富士塚は東京都二基、埼玉県一基のみです。

足立区、江戸川区のように区内の多くの富士塚が区指定の文化財になっている例もありますが、これは例外中の例外で、富士見十三州に点在するすべての富士塚が棄却の可能性を持つと云って過言ではないでしょう。

## 敬神の道標⑥

### 「富士塚」の研究書一

何年かのサイクルで、富士塚がブームになっているようです。その時々には、いわゆる「富士塚巡り」といった書籍が今までも数多く出版されていたのですが、その多くは地方の研究者が地元元の塚をコツコツと調査されたもので、不十分ながらも新発見が含まれていて勉強になったものです。

少なくとも以前は、「富士塚」などというものは一部の好事家が対象にするものでした。そうした方々は概ね真面目な方が多いので、図書館で「富士塚」のことを調べる。そうすると、必然的に偉大なる先人たちの実績を知ってしまう。そこで、孫引きをあきらめて関心を失うか、なにくそと新しい塚の発見に挑むか、そのどちらかのパターンしか存在しないのが富士塚研究だったのです。最近のインターネット世代のが、最近のインターネット世代のコピー（コピー&ペースト）複製による転写）の節操の無さにはあきれるばかりで、まるで、雑誌の

企画のノリで同じような富士塚の探訪記が出版されています。

確かにそうした書籍にも富士塚、富士講への関心を高めるといった利点が無いわけではありませんが、信仰の聖地でもある富士塚をただ、ぶらぶらと歩いて言い訳はごさいません。何よりも富士塚とは富士山の写しでありますので、真摯な気持ちでお参りいただきたいと思います。また、近いうちに都内の富士塚をお参りする企画を予定しておりますのでどうぞ関心のある方はご参加をお願いします。



富士塚の調査研究、保存の活動は、故岩科故一郎氏を中心とする「富士講研究会」のメンバーによって支えられてきたといつてもいいと思います。岩科氏によって富士塚研究の集大成といふべき「東京の富士塚」が氏の主宰する

あしなな第148号（昭和50年12月）に発表されましたが、多かれ少なかれ都内の富士塚の記事はこの本からの引用です。今では現物を入手するのはかなり困難ですが、『あしなな』の復刻合本を図書館などで閲覧することができま。また昭和53年刊行の日本常民文化研究所調査報告第2集『富士講と富士塚―東京・神奈川―』にほぼ全文が掲載されていますので、こちらを読まれると富士講の歴史、定義を含めて参考になると思われます。

昭和54年刊行の第4集『富士講と富士塚―東京・埼玉・千葉・神奈川―』は第2集が、都内の富士塚だけを対象としていたのに対し、埼玉、千葉、神奈川と範囲を広げてしまったために、未調査の地域も多く悉皆調査とはいえないものとなってしまいました。富士塚分布の資料として用いるにはやや注意が必要な文献です。

神奈川については「富士講研究会」のメンバーである大谷忠雄氏が神奈川の富士講、富士山文化研

究会会員の故小林謙光氏のご研究が真面目で参考になります。千葉県は、沖本博氏の房総の石造物。埼玉は完全にまとまったものがないため、部分的ですが、県立春日部高等学校の轍。本庄高等学校のはもりに地域の富士塚の調査結果が掲載されています。残念ながら『新編埼玉県史別編2民俗2』の富士講に関する記述は参考にできません。やっつけないやっつけ仕事の典型と云っていいでしょう。全国の調査としては、精度には疑問が残るものの平成8年度に富士市立博物館主導で行われた富士見十三州富士塚調査報告書があります。

富士塚の概論は、平野榮次氏の「富士と民俗・富士塚をめぐって」(月刊文化財2005)が最適です。こちらは岩科氏の「富士講の歴史」とならぶ基本文献である『富士浅間信仰』に収録されています。

富士塚に関する文献、資料を入手する目的では、富士山文化研究会誌第八号所載の富士塚研究会史概論が役に立ちます。